

ECO.

トヨタで巡る、
子供・未来・学校の旗
SOTOKOTO
環境移動教室
協賛→トヨタ自動車(株)
写真→鈴木真貴
文→松井健太郎
構成→ソトコト編集部

SPECIAL PRESENT from OOOO

原田郁子

講師
ロバの音楽座

人と自然をつなぐ プリミティブな音。

歴史を辿っていくと、音楽はよりアコースティックに、
よりプリミティブなものとなり、
その存在の意味も現在とは変わってくる。
例えば伝統楽器ハクハイブが、
羊飼いが羊たちを慰めたり
集めたりするためにあったというように、
音楽は人に聞かせるためだけでなく、動物や自然界、
または目には見えない「なにか」と
繋がるためのものでもあったのだ。
今回のソトコト環境移動教室では、
今よりも、もっと自然に近かった頃の音楽のあり方を、
古楽器や世界各地の伝統楽器から感じてみた。



SOTOKOTO 環境移動教室でロバの音楽座が取材されました。河原での音さがしから始まった一日が記事になりました。

ソトコト 2月号 (第9巻第2号) 発行 = 木楽舎

**古来、石は楽器だった！
多摩川の川原で石探し**

「では、今から自分が気に入った音の鳴る石を探そう」と、多摩川の川原に集まった子供たちに声をかけるのは、古楽合奏団・ロバの音楽座のリーダー松本雅隆さん。いい音のする石をロバの音楽座の活動拠点であるロバハウスへ持ち帰り、楽器に見立ててみながら演奏しようという計画だ。

「ようし、探さぞ」と元氣よく駆け出した子供たちに誘われるように、クラムボンのボーカリスト、原田郁子さんも石探しを始めた。

プリミティブな楽器で奏でる音楽、それは気持ち伝える道具です。



多摩川の川原で石を探す原田郁子さんと子供たち。「この音、よくない？」と拾っては叩き、好きな音の鳴る石を見つける。ひとつひとつの石から微妙に違う音が出ることを発見した。男の子は選りきれず、胸のポケットにまで石を入れている。

子供たちは川原にしゃがんで石を拾い上げ、ひとつひとつ叩いて音を吟味する。キンキンと乾いた音、コンコンとこもった音、石の大きさや厚さ、おそらく含まれている成分によっても微妙に違う音が出る。叩き方によっても変わる。「大きい石だと音が低くない？」

「これ、不思議な音がする」「木琴の音みたい」と、子供たちもその違いに気づき始める。「これ、いい音しない？」と、ほかにない音の鳴る石を見つけて原田さんに聞かせる女の子。

子供たちははだいに夢中になって石探しに没頭し始めた。トントン、カチカチ、まるで鍛冶屋さんのように石を叩いてまわる。「平たいのいい音がするかも」「発見した！こすると面白い」「並べてドレミファをつくろう」と、石を並べて叩く男の子も。こうなるとまさに石は楽器だ。

「楽器はもともと石ころとか木の棒とか自然の物から生まれたんだ。モロッコあたりの民族楽器の合奏では石ころが使われたりもするからね」と子供たちを見守る松本さん。自ら石を拾っていたが、しばらくして、みんな、拾った石を持

って来て」と子供たちを呼び集めた。しかし子供たちは、「まだ！」「あと少し探させて」と、石探しをやめようとしないう。女の子のひとり、両手に持てないほどの石を集めて来て「選べないよ」と困った顔。男の子は両手のほかに、シャツの胸のポケットにまで石を詰め込んでいる。



丸い石、細長い石、ストライプ柄の石、平たい石。子供たちが拾い集めたお気に入りの石ころ。

「と笑う原田さんの声に、しばらく従う子供たちだった。

音楽は言葉、石の声に耳をすまして

東京・立川市にあるロバハウスへ車に乗って移動した。到着するやいなや、子供たちは「可愛い家！」と歓声をあげた。そう、ロバハウスはまるでおとぎの国にあるようなピンクの壁に木枠の窓のある、温もりにあふれた家なのだ。階段を下りて地下のステージへ行き、原田さんと子供たちは床の上に丸くなって座った。松本さんのレクチャーが始まる。

「多摩川で拾った石、ひとつは左の手のひらの上のせて、もうひとつは右手に持って。自分の石と右隣の人の石を交互に叩こう」

カチン（自分の石、コチン（隣の人の石）、カチン、コチンと、子供たちはみんなリズムと呼吸を合わせながら石を叩き始めた。「今度はリズムを変えて、隣の人の石は2回叩こう」カチン（自分の石）、コン・コン（隣の人の石）、カチン、コン・

コン……。

「じゃあ、次。僕が石を叩いてみんなに話しかけるからそれに石で答えてね」と松本さんは、リズムや強さを変えながら石を叩く。カ・カ・コン・カン・カコ。まるで石が喋っているように聞こえる。その石の音に、子供たちが自分の石を叩いて答える。コリ・カ・カ・カン・カ。笑ったように、驚いたように、困ったように、ささやくように。



ステージに座り、ロバの音楽座の伴奏にあわせて石を奏でる。奥にあるのはカンパネラという自作の空想楽器。

もちろん言葉そのものではないので意味は定かではないが、小刻みに叩いたり、遠慮がちに叩いたり、突然床に石を落としたりすることで、伝えようとする気持ちは表現される。石の音による意思伝達は、松本さんも言っていたがまさに言葉によるコミュニケーションの原形だと思えるのだ。

所狭しと並べられている。「例えば、これは北欧の森で白樺などの木でつくられたラッパ」と松本さんが棚から取り出したのは、シンプルな筒状のラッパ。松本さんは口をあてて吹いてみる。プーバー、プーポウー！

「あ、出た！」と女の子は大喜び。「私も吹きたい。どうやったらいいの？」と聞く。「唇をね」と子供たちは互いにコツを教えあって順番にラッパを吹いて回る。さつきうまく吹けなかった男の子も、プオー！と大きな音を鳴らした。「うまい、うまい！」と原田さんも手を叩いて喜ぶ。



上/木の温もりにつつまれたロバハウス。壁には貴重な古楽器が並び、地下のステージは吹き抜けになっていて、子供たちが顔を覗かしているのが、下/人形やイラストなど、あちこちにロバの装飾が。

風、木、石、自然はみんな“楽器”。音楽を探しに自然の中へ行こうよ。

1982年に結成されたロバの音楽座。世界中を旅して集めたり、文献を参考にしてつくられた中世・ルネサンス時代の古楽器や身近な素材でつくりあげたオリジナルの空想楽器で全国各地で演奏している。リーダーの松本雅隆さんは、「古楽器は今の楽器よりも遊びの部分が多く、自由度があります。楽器の素材も木や動物の皮など自然そのものなので、音色も素材で温もりが感じられます。演奏を子供たちに聴いてもらったり、ワークショップで一緒に楽器をつくりたい。今日は、川原の石ころが楽器になる瞬間を感じてもらい、プリミティブな古楽器の魅力全体を味わってもらえたらと思います。東京・立川市にあるロバハウスを拠点に全国でコンサートを行い、テレビ番組の音楽も多数担当するロバの音楽座は、98年に東京都優秀児童演劇選定優秀賞を受賞、2006年にはスタジオジブリのアニメ映画「ゲド戦記」の音楽に参加するなど、その音楽活動は高い評価を得ている。

ロバの音楽座の皆さん。
■公演スケジュール
2月4日 名古屋市 千種文化小劇場
2月17日 人間市 文化創造アトリエ・アミーゴ
2月23日 福岡市 少年科学文化会館
2月24日～25日 福岡県北九州市 北九州子ども劇場
その他、全国各地で公演予定あり。さらに今回訪れたロバハウスでも毎月定期的にコンサートを行っている。詳しくはウェブサイトをご覧ください。
●ロバの音楽座
http://www.roba-house.com
〒190-0002 東京都立川市幸町6-22-32 ロバハウス
tel.042-536-7266
e-mail:info@roba-house.com

**森の中では耳の感度がアップ!
自然の音楽に元気をもらってます。**

環境移動教室の終了後、「すごいだよ〜」と原田郁子さんがスタッフに駆け寄ってきた。「記憶違いかなあと考えてたんだけど、やっぱりそうだった。私子供の頃“子供劇場”に入ってたね、ロバの音楽座を観たことがあった」と嬉しそうに顔をほころばせた。「今、小淵沢の山の中にあるスタジオでレコーディング中なんだけど、いつも感じるの、東京にいたときと耳の感覚が変わるということ。スキューとした静けさに慣れると、だんだん耳の感度がアップしてくる。遠くで鹿が鳴いたり、葉擦れの音で風がわかったり。そうやって耳を開いていくと、なんだか力が湧いてくるんだよね」と“自然の音楽”からパワーをもらっている原田さん。一番のお気に入りの古楽器は、ポルタティブオルガンだったそうだ。



クラムボン初のライブアルバム。Clammbon 3peace ~live at 百年蔵~ (コムピア) 3150円
空想楽器、ガランピーボロンを弾く原田さん。今後の曲づくりに生かされるかも?

**Think Ecology
for
the Future of the Earth.**

子供たちと一緒に体験するエコロジー。あしたの地球のために、いまできること……。SOTOKOTO環境移動教室は、TOYOTA ECO-PROJECTの協力により実施しています。
www.toyota.co.jp/eco



エスティマ・ハイブリッドで冬の訪れを感じながら玉川上水エリアを静かにドライブ。

原田郁子(はらだいこ)

クラムボンのボーカリスト。福岡県生まれ。繊細な女性の心をささやくような独特の声で歌い、共感を呼ぶ。クラムボンは、1999年シングル「はなればなれ」でメジャーデビュー。2006年、初のライブアルバム「3peace ~live at 百年蔵~」を発売。今年2月18日のイベントclammbon presents「sound circle」にも出演する。原田郁子は、04年に初のソロアルバム「ピア」を発表。05年には「ohana」というドリームバンドを結成し、06年にアルバム「オハナ百景」を発売。また、写真家・原田奈々とのフォトエッセイ集「ソーリスモ」でエッセイを手がけ、大きな反響を得た。
クラムボンHP <http://www.clammbon.com>

ソトコでは、環境移動教室にご登場いただいた講師の方々を、あなたの街の学校の学外講師として派遣するお手伝いをいたします。詳しくは、HPをご覧ください。www.sotokoto.net/eco-teachers/



上/原田さんが吹いているのは、犬の装飾が施されたベトナムの土笛。ポープフープ。「柔らかい土の音がするね」。下/子供たちはお気に入りの楽器を手に、ロバの音楽座と一緒に合奏した。左/空想楽器、ガランピーボロン。ガランは鈴、ピーは笛、ボロンは弦。ユニークな自作の楽器だ。



右/ハーディーガーディーはヨーロッパの民族楽器。椅子に座ってベルトで体に固定し、ハンドルを回しながら演奏する。左/ブルサルテリは中世の琴。膝の上に置き、鳥の羽や指でつま弾く。ピアノの原形。



何世紀も前の、何万キロも離れた国の珍しい楽器にふれ、子供たちは、そのプリミティブな音色を耳にして何を思ったろう。石ころが奏でる音楽を愛する気持ち、いまでも大切にしたい。

松本さんの声で合奏が終了した。そのとたん、子供たちは声をあげ、原田さんと手を叩いて喜んだ。子供たちは気づいてくれたようだ、石ころも楽器になるということ。木の枝も、動物の角も、自然のものは何だか楽器になり、音楽を奏で、思いを伝えようための素敵な道具になる。楽器だけではなく、今、目の前に存在するものにはすべて歴史がある。窓の外は日が暮れかかり、星降る冬の夜が訪れようとしている。

あり、その川をさかのぼれば、拾った石ころのように、ふだんは見逃していた大自然のひとかけらにたどり着くかもしれないのだ。みんなで録音した合奏を聴く子供たちは、照れながらもちょっと自慢げな顔つき。原田さんは目を閉じて、じっと耳をすまして聴き入っていた。



上/バグパイプの演奏に挑戦する女の子。「そう、いい感じ」と原田さんが手を添えてあげる。下/これはハーディーガーディーという古楽器。右手でハンドルを回しながら左手で鍵盤を押さえて音を出す。踊りを踊るときによく使われる楽器。

好きな古楽器を手に、みんなで合奏しよう

たくさん古楽器を体験し、子供たちもすっかり音楽に親しんできたころ、「みんなで楽器を持って合奏してみようか」と松本さんが子供たちを集めた。「バイオリンやったことのある人いる?」。

「じゃあ、君、ポウドブサルテリ。バイオリンに似てるから」

子供たちはそれぞれ、自分の気に入った楽器を手にして、スタンバイ。原田さんが選んだのはプサルテリという中世の堅琴で、現

在のピアノの原形だそう。最初は、石を小さく叩く。だんだん大きな音を鳴らす。太陽が昇るイメージだ。子供たちは石を置き楽器を弾き始める。土笛がポウポウ、木のラッパがブワ、隣の子が弾くと次は自分がというように、

「では、今からみんなで合奏します。静かに夜が明けて、太陽が昇って、昼になって、街ではお祭りが始まる。やがて夕暮れが迫って、街の人たちは家に帰り、日が沈み、また静かな夜になるという一日を、音楽で表現してみよう」

子供たちは少し緊張の面持ち。いよいよ合奏が始まった。

最初は、石を小さく叩く。だんだん大きな音を鳴らす。太陽が昇るイメージだ。子供たちは石を置き楽器を弾き始める。土笛がポウポウ、木のラッパがブワ、隣の子が弾くと次は自分がというように、

「OK!」

「この牛の角で作られたラッパは楽器でもあるんだけど、声の届かない遠くにいる人に「朝になったよ」とか「ごはんができたよ」とって知らせる道具でもあったんだ」と、昔々の楽器の成り立ちを教えてくださいました。子供たちは、知らなかつたという顔で聞いている。「これはね」と、松本さんは次の楽器を持ってくる。「バグパイプ」という楽器。革の袋の皮をバググってというからバグパイプ。この袋の部分は羊や山羊の皮でできていて、ここに空気をいれてふくらませて……と、松本さんは革の袋に空気を吹き込み、いっばいに膨らんだところでそれを脇に挟んで空気を押し出しながら演奏した。ロバハウスにハーモニックな大きな音が響き渡る。

な表情で聴き入っている。「バグパイプは羊飼いが使っていた楽器。羊飼いは丘の上で一日中ひとりぼっちだからバグパイプを吹いていたかもしれないね。上手に奏できれば、羊もいとお乳を出したんだって」

松本さんの話が終わると、「吹いてみたい」とさっそく男の子が近づいてきた。肩から担ぐようにバグパイプを構え、持ち方を教わりながら演奏の仕方を学んでいた。その後も、子供たちはたくさん古楽器にふれ、そのナチュラルでプリミティブな音色や感触を体全部で感じ取っていた。

傘の柄のような形をしたクルムホルン。動物の骨や内臓が使われている笛。鼻息で吹く笛など、さまざまな古楽器にふれ、演奏してみよう子供たち。どの古楽器が好き?



**セルパン、土笛、クルムホルン。
500年前の古楽器を演奏したよ。**

